

### 横芝の碑 (その三十四)

## へ石像の雛形奉納

本町道祖神に残る風習

本町観音寺の裏通りに、如何にも由緒あり気な杉の老樹に囲まれて、一字のお堂が建っています。

格子戸の扉の上には、道祖神と墨書した額が掲げられています。このお堂は、近在の善男善女の信仰を集めている。通称どろく神様と呼ぶ道祖神様です。

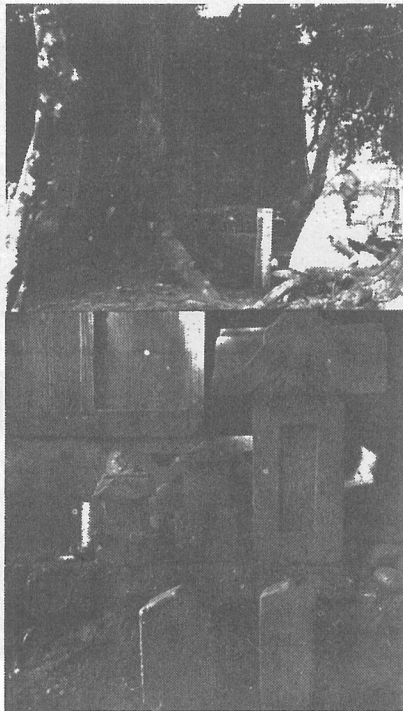
道祖神様については、広辞苑、歴史辞典等を繙きますと、「どろくじん、さいのかみ等とも呼び道路の悪霊を以て通行人の安全を守る神とされている。太古は、くなどのかみ、たむけのかみ、ちまたのかみ、ひきものがみ等と称し、外から襲ってくる疫病や悪霊を防ぎ止める神とされていた。祠は、村境、道路の辻、橋の裾等に建てられて、あの世との境とも考えられていた。そうした印象から祖先を送り迎える場所としての風習となり、後世は饗宴、縁結、安産、子供の神等、女性や子供の祭り神としての信仰に転じてきたものようである。石像も自然石に文字を刻んだものから、像を刻んだもの等いろいろである云々」とあります。

さて、この道祖様は、前述し

であるとおり、どろくじん様と呼んでいます。縁起は相当古いらしく、今から三十年程前、一本の御神木に落雷があつて、途中から切り取った様に折れてしまつた

ことがありました。その時に年輪を計った古老が、「香取神宮の御神木位古いだらう」と鑑定を下したという話が残っています。何時の頃からかわかりませんがこのどろく神様に願いをかけてその願ひごとが叶うと道祖神様の雛形の石像を奉納する、という風習があります。格子戸越にお堂の中を覗いて見ますと、うす暗い土間には、今でも将棋の駒の形をした石像が沢山並んでいるのが見受けられます。ある物好きな人が、「子供さんの玩具用に」とこの石像を家に持ち帰つたところ、その夜中に、突然子供さんが飛び起きて「父ちゃんの石泥棒！」と大声で叫び出したので、慌てて戻してきましたが、翌日いっぱい気が料めて苦しみ続けた。ということです。これを聞いた人々は「神罰だ」と噂し合ったという話です。神罰といえはこんな話もありです。このどろく神様の御手洗の水が

身体にとてもよいというので、霊泉として遠い所からも瓶や水筒等を持って水もらいに来る人があるそうです。或時、欲の深い人があつて、リヤカーに大きな樽を積んで水汲みに来たところ、一回目は何事もなかつたのですが、二回からは、全く水が出なくなつたり、また出てきても、砂等がまざつていたりして、飲み水は勿論、洗濯用にもならない有様でしたので、「これは欲をかいた神罰であらう」と慄い上つた、というのです。きつと子供さんの純真な気持に目覚



ます。○写真上は、どろく神様の御神木とお堂です。休憩用のベンチに休んでいる人が見えます。この人は老人ホームの鈴木竹治さんという老人で、やはりどろく神様の信者だということでした。成程、奉納された下げ轆の中に、その名前が見付かりました。老人の後に短い柱の様に見えているのは、欲深く水汲みをする神罰があるという御手洗用の水道です。太く見える御神木のうち、手前の杉が落雷に遭つたものです。よく見ると

めた大人の良心や、科学的な要素から、そうした結果が現れたのかもしれませんが、「二つとも本当にあつた話」として伝えられています。

横芝町大字横芝は、俗に、上町(役場、郵便局周辺)本町(警察観音寺周辺)東町(児童館、駅、農協周辺)の三区に大別されている。

上の方が切り折れているのが分ります。御神木の向うに隠れるようにしてお堂が見えています。写真では分りませんが、格子戸の中には、ゴム草履が二・三足供えられています。昔は草鞋等が供えられていたということですから、やはり道路に縁はあるようです。○写真下は、このどろく神様の

仕守りをしてもらえる、本町の杉森才二さん(現町議)にお願いして、お堂の外に並べていただいた石像の雛形です。お堂の中にあつた時は将棋の駒形にしか見えませんでした。外のもので見ますと、それぞれ道祖神と刻まれ、中には、天蓋の様な頭形を戴いたものや、奉納者の名称や氏名を刻んだものもあります。大きさは大きい十五糎位なので、子供さんの玩具や、庭の飾物等に、と考えたくなるかもしれませんが、この雛形は、信仰厚い人々が心をこめて奉納した石像で、その一つ一つが道祖神なので、若し、持帰る、という破廉恥族は、神罰と良心の呵責を覚悟しなければなりません。もつとも、道徳的にも許されないことでしょう。(本稿取材に当り、栗山官脇の村田さん、また、本町の杉森さん、舛ノ内さん等、どろく神様周辺の皆様の御協力をいただきました。)(養護老人ホーム小沢所長寄稿)

